

『資本論』を読んだ人々

— 下からのメディア史の試み

有 山 輝 雄

—

今どきの大学生は、『資本論』をどの程度読むのだろうか。大学生協書籍部で『資本論』は年間何冊ほど売れるのだろうか。かつては、経済学部の学生はいうまでもなく、法律や文学を学ぶ学生も『資本論』くらい読んでいなければならないという強迫観念が広くいきわたっていた時代もあった。学術論文などには『資本論』からの引用が満ちあふれ、引用の適否や語句の解釈をめぐる激しい論争が繰り返されていたのである。

もちろん、『資本論』は経済学にとって今も最重要文献の一つなのだろうし、近年新しい翻訳さえ出版されている。欧米の現代文化研究の論文などでも『資本論』やマルクス主義の文献からの引用をよく見かける。しかし、知識青年たちの必読文献といった雰囲気はなくなっていることは確かであろう。最近ある大学の紀要掲載の論文をたまたま瞥見したところ、全体の論旨とはまったく無縁で、場違いとしか思えないところに『資本論』の一節が引用されているので一驚したことがある。今どきの大学教員にとって敢えて『資本論』を引用することが一種の銜学趣味になっているのであろうか。

そもそも学問的・思想的著作にとって一時のはやりすたりなどはどうでもよいことであって、そんなことを論ずること自体大変失礼なことであろう。しかし、私が勉強しているメディアの歴史にとっては、ある書籍がどの程度売れ、どのような人々によって読まれていたのかは重要な問題である。メデ

ィアは送り手と受け手のあいだを仲介するものだから、受け手（読者・視聴者）のことが分からなければ、メディアやメディア・コミュニケーションの研究は成り立たないのである。受け手の研究は、E・P・トンプソンの「下からの歴史」¹⁾のひそみにならえば、「下からのメディア史」²⁾といえる。

ところが、実際に「下からのメディア史」に取り組むとなると、ごく普通の暮らしをしている読者・視聴者の生活や意識についての資料がほとんどないという隘路に直面してしまう。特別な地位にあった人物や様々なことを書き散らすインテリについては、記録が残るが、ごく平凡な人生を生きた人々については、ほとんど何も残らないのである。読者・視聴者の歴史的研究は、たまたま発掘したごくわずかな断片を子細に観察し、他の断片と組み合わせると土器を復元しようとする考古学に近いところがある。

ここで取りあげようとするのは、福島県北部の一小都市である梁川町（現伊達市）の読者の事例である。この町の阿部長兵衛氏の経営する新聞販売店阿部回春堂が明治末期から昭和初期にいたるまでの「新聞配達元帳」と「雑誌配達元帳」を保存しており、梁川町民の新聞購読、雑誌購読、書籍購読について詳しく知ることができるのである。歴年すべてがそろっているわけではないのが残念といえば残念だが、現在残っているだけでもありがたく、他にこれだけの資料は見たことがない。断片というより一部が欠けただけの土器といったほうがよい。筆者は、この資料をデータベース化して分析作業を進め、その成果を一連の論文として発表している³⁾。本稿もその一環であるが、今回は、1928（昭和3）年の『資本論』読者についてみよう。

梁川町の概要について、やはり最低限触れておく必要がある。梁川町は、福島県中通りの伊達郡の北部、阿武隈川の南東に位置している。福島県としても最北東部にあたり、町の北部は宮城県と隣接し、東部は阿武隈山系、西部は福島盆地につながっている。阿武隈川と広瀬川の合流地に町が発達し、古くから「伊達の浜」と呼ばれ水利・水運にはめぐまれていた。1930（昭和5）年の国勢調査によれば、梁川町の人口は6,807人、世帯数1,254である。周辺を農村に囲まれた小都市である。

江戸時代には、幕府領と小藩領地との交替を繰り返し、いずれの場合も梁川城に陣屋を構えられ、この地の行政が行われた。1807年には北海道松前藩が転封されたが、北海道への帰還を希望する家老蠣崎波響などの必死の工作によって、1821年に再び松前に移封となり、松前藩支配は短期間に終わった。⁴⁾その後、幕府領となった後、1856年に松前藩の飛地となり、松前家は奉行を派遣し支配した。そのまま廃藩置県となったため、梁川の町は城下町の風情を残しているが、江戸末期・明治期と士族はほとんど町に居住していなかった。

梁川町の中心産業は何といても蚕種の製造販売である。江戸期から梁川、桑折、保原一帯は蚕種の生産地として広く知られ、特に梁川、向河原、二野袋、粟野などの村々は、「蚕種本場」と称して全国市場でも大きなシェアを占めるまでになった。明治期にはいと、蚕種・生糸の生産はますます盛んになり、蚕種家たち町の名望家によって1877年に第百一国立銀行（初代頭取大竹宗兵衛）が梁川に創立されている。⁵⁾

1900年代から1920年代前半にかけてが養蚕業の全盛時代である。梁川の蚕種家は積極的に事業を展開し、伊達郡・福島県にとどまらず、日本国内さらには海外市場と広い商圈を形成していた。しかし、1920年代半ばから、梁川に限ったことではないが、蚕業は次第に不振に陥り、梁川の町も非常に深刻な困難に直面することになった。

これまでの一連の研究で明らかになった結果について詳述することはできないが、1928年の『資本論』読者を考えるうえで必要なことだけ簡単に触れておくことにする。第一に新聞の購読率は世帯当たり約52%である。⁶⁾定期購読者に限定すれば15%の普及率、そのうち3%は複数紙を定期購読している。新聞読者の37%は不定期読者である。1920年代初頭から新聞購読率はほとんど上昇せず、15%の定期読者、37%の不定期読者、48%の非読者というピラミッド構造は変化がなかった。このピラミッド構造は、町の政治・経済の中心である有力蚕種家を頂点とする社会階層と重なっている。

第二に、1920年代後半期、雑誌や書籍の購読が大きく上昇した。全国的現

象である講談社の『キング』発刊、円本の大ブームが梁川にも波及したのである。雑誌購読者は、1918年に比較して約25%も増加した。雑誌以上に伸びたのが書籍である。書籍購読者は、1918年から3倍近い大幅な増加を示している。これだけ大きな増加は、やや大げさな表現をつかえば、メディア革命とっていえなくもない。

しかし、これら雑誌・書籍は平均的に普及したのではない。雑誌や書籍を購読したのは、前述のピラミッド構造の上部の階層である。彼らは、もともと新聞を定期購読しているところに、雑誌や書籍を購読するようになり、ますます質量ともに豊かな情報を蓄積するようになった。新聞をまったく読んだことのない層との情報格差は、これまで以上に大きく拡大したのである。メディア革命の意味は、多くの人々がメディアを利用するようになったということにあるのではなく、社会の上層部のメディア利用だけが拡大し、社会の垂直的な分化が昂進したということにある。別な言い方をすれば、メディア利用を社会階層としてみると前述のようにピラミッド型なのであるが、情報配分からみると、上部が質量ともに豊かな逆ピラミッド型になっていったのである。

1920年代30年代を大衆的社会的出現、その派生としての平準化の進行と見るのが、これまでの大方の研究である。メディアは大量生産大量販売の規格化された商品の典型であり、かつ社会全体の大衆化を推進する機構とみなされてきた。しかし、これは実証的データの乏しい議論である。実際に地域社会に降りてみれば、いわゆるメディアの大衆化はきわめて限定的なものであり、限定的な大衆化のなかで、きわめて不均等な普及によって平準化とは逆に情報の格差がこれまで以上に拡大したことこそがこの時代の特徴である。

二

やや前置きが長くなりすぎたが、1928年に梁川で何人の住民が『資本論』を読んでいたのであろうか。16人の人々が阿部回春堂から『資本論』を買っていた。人口7,000人にも満たない、この東北の小さな町で16人もの住民が難

『資本論』を読んだ人々

解な『資本論』を購読したというのは、別に本を読まない現代の大学生の例など引き合いにださなくても驚くべきことだ。

「雑誌配達元帳」には出版社などの記載はないが、この『資本論』は、前年に改造社から刊行された高畠素之訳の全5冊本であろう。このうち3人は『資本論解説』⁷⁾を合わせて購入しており、また、『マルクス・エンゲルス集』、『社会思想全集』といった社会問題関係書を購読している者もいる。きわめて真面目に『資本論』を学習しようとしていたことが分かる。

『資本論』の購読者は、大きく二つに分けることができる。一つは梁川出身の地付きの住民、もう一つは一時的な住民である。

阿部回春堂の「新聞配達元帳」、「雑誌配達元帳」には購読者の姓名、購読新聞・雑誌・書籍名、月毎の入金状況が記載されており、それだけでは購読者の経歴などは分からない。しかし、配達の便宜のため地区別に整理されており、1928年の帳面には地区別とは分けて「役場警察署講習所取締支所蚕業試験所」と「各製糸場」という項目がたてられており、「役場警察署講習所取締支所蚕業試験所」に7人、「各製糸場」に1人の『資本論』読者がいる。通常阿部回春堂の文書は姓名が几帳面に記載されているが、「役場警察署講習所取締支所蚕業試験所」の7人は1人をのぞき姓だけしか記されておらず、4人に「試」1人に「支所」と注記がある。また、地区別の項目に入れられている『資本論』読者の1人も姓だけで「寺」と注記されている。恐らく阿部回春堂は姓名を知らなかったのである。明治期以来梁川町で営業している阿部回春堂は町の出身者のほとんどを熟知しているはずで、姓だけしか知らないというのは、これら8人の読者は梁川の出身ではない一時的な居住者であることを推察させる。

「試」は蚕業試験場、「支所」は蚕業取締所支所の職員。「寺」はどこかの寺の学僧であろう。「各製糸場」の1人も「阿部」と注記があるので、阿部製糸場の職員である。梁川は「蚕種本場」と自負したように、伊達郡など周辺の地域の蚕業の指導的機関が置かれていた。蚕業試験場は1914(大正3)年に福島県原蚕種製造所として設立され、原蚕種の配布、試験調査、講習会開

催などの活動を広く行っていた。1923年に省令により府県原蚕種製造所規定が廃止され、梁川町の原蚕種製造所も府県蚕業試験場規定によって蚕業試験場と改称となった。⁸⁾また蚕業取締支所は、1897年蚕種検査法に基づき福島産業検査所として設置され、その後変遷があったが、1912年蚕糸業法発布により蚕業取締所梁川支所となった。⁹⁾

これらの機関には農業技師が勤務していたが、彼らは梁川町の出身ではなく、一定年数梁川に勤務したのであろう。また彼らは俸給生活者であって農業・商業に従事している多くの住民とは生活様式を異にしていたし、恐らく農業関係の教育を受けており、それなりの知識人なのである。

要するに『資本論』読者の半数は、一時的住民で、俸給生活者・知識人であったのである。残りの半数は、帳面の地区別項目に姓名を記載されており、またその姓から見て梁川出身、多くは代々居住している地付き住民である。

まず、一時的居住者についてみれば、地方小都市の農業技師や学僧といった社会科学とは比較的縁遠い知識人が『資本論』を読んだというのは、マルクス主義の影響が広く及んでいたことを示している。特に農業技師は、蚕業の衰退が顕著になってきている状況だけに危機感をもち、社会や経済の仕組みに関心をもったのかもしれない。

当然のことながら、彼らは『資本論』だけを読んだのではない。ところが、『資本論』読者全員の購読した新聞・雑誌・書籍のタイトル点数を集計してみると、一時的住民は平均6.8点、町出身住民は17.5点である。これは定期購読不定期購読を区別せず、たんにタイトル数だけで集計したので、ごく大ざっぱな目安であるが、明らかに一時的住民は、購読しているメディアが少ない。収入が一定の俸給生活者であるだけに、やりくりのなかで選択的に購読しているのであろう。

顕著なのは8人のうち、新聞を購読していたのは1人だけであることである。しかも、この1人も不定期購読である。恐らく彼らは勤務先で読むことにしていて、自宅では新聞を購読していないのである。ただ、蚕業試験場が定期的にとっていた新聞は、『福島新報』、『福島民友新聞』、『福島毎日新聞』

『資本論』を読んだ人々

といった地元新聞で、中央の新聞で定期購読していたのは経済専門紙である『中外商業新報』だけである。このほか蚕業試験場職員の親睦団体と推定される蚕業試験場クラブが『東京朝日新聞』と『東京日日新聞』を不定期に購読していた。総じて農業技師たちが新聞から入手できる情報は地元福島の新コースと経済関係ニュースに偏っていて、中央の政治・社会・文化関係のニュースは少なかったのである。

さらに雑誌・書籍で読んでいるのは、一つは蚕業関係の雑誌・書籍である。また一つは娯楽・教養関係の雑誌・書籍である。

蚕業取締所支所の渡辺は『蚕業新報』、蚕業試験場の浅沼は『植物学雑誌』、『病虫害雑誌』、『昆虫世界』といった雑誌を読み、西尾兼一は『蚕卵論』といった本を読んでいる。こうした読書は、職業がら当然だが、熱心な学習であることは間違いない。

『資本論』など読んでいない住民のなかにも蚕業関係の雑誌や書籍を読んでいるものもいた。当時、蚕業不振のなかで様々な議論があったが、そのなかで福島あるいは伊達郡の蚕業技術の立ちおくれを指摘する意見もあり、梁川の蚕業関係機関、住民も最新の情報を取り入れようとする熱意が強まったと推定できる。

しかし、これら農業技師たちは、蚕業関係の専門雑誌や書籍を読んでいるだけでなく、娯楽・教養的な雑誌・書籍も幅広く読んでいる。3人が『キング』を読んでいる。「国民的大雑誌」、「世界的な大雑誌」、「日本一為になる、日本一面白い、日本一安い」などをキャッチフレーズにした大宣伝によって大発行部数をえた講談社の『キング』について詳しく触れることはできないが⁽¹⁰⁾、しばしば体制に従順な価値観が基調にあると説かれる。だが、実際には『資本論』と『キング』は同じ読者によって読まれていたのである。

また、『婦女界』を3人、『主婦之友』を2人が購読している。いずれも不定期購読である。『婦女界』は都河龍の編集する婦人雑誌で、この時期は石川武美の『主婦之友』に押され気味であったのだが、梁川では全体的に『主婦之友』より『婦女界』のほうが売れていた。これらは主婦向け雑誌であるか

ら、彼らの家庭の主婦のために購読したのであるが、これらの家庭では新聞をとっていなかったため、主婦は新聞を読まずに婦人雑誌を読んでいたことになる。

書籍では、折から大ブームになっていた円本を購読している。3人が円本ブームのきっかけをつくった改造社の『現代日本文学全集』を購読し、『世界文学全集』を不定期に購入した者が2人いる。ただ、全員が円本以外に小説類の単行本は買っていないので、日頃小説を読むという習慣はなかったと推測される。一冊のなかに“名作・代表作”をパッケージした円本という書物の形式が、農業技術者にも文学に親しむ機会を用意したのである。「文字の上では安定しているかに見えるテキストも、読まれるためにそのテキストを提供している印刷物の仕掛けが変わるとき、思いがけない意味作用やステータスを身におびてくる」のである。¹¹⁾

その他、単行本としては、先にも触れた『資本論解説』を購読した3人、『現代法学全集』を2人、『マルクス・エンゲルス集』を1人が購読している。難しい書物を読んでいるのである。

こうした読書傾向で特徴的なのは、時事的問題、現に進行している政治問題・社会問題への関心がうかがえないことである。自宅で新聞を購読していなかったことも、その表れの一つである。勤務先で新聞を読んでいたにしても、地元紙や経済専門紙に偏っていた。また、『改造』、『中央公論』といった時事的な政治・社会問題を扱う雑誌はほとんど読んでいない。

彼らの『資本論』読書は、決して気まぐれや目先の流行に飛びついたというのではなく真面目なものであった。蚕業試験場だけで4人も読んでいたのであるから、学習会などが組織されていたかもしれない。しかし、その関心は、政治・社会問題との結びつきは弱かったのである。当時の政治・社会問題について鋭い関心から出発して『資本論』の読者に向かったのではない。無論、学問的関心から読んだのでもない。

先にも触れたように日本の蚕業全体が不振に陥っていく当時の情勢に対し彼らも漠然とにせよ強い危機感をもっていたと考えられる。しかし、その危

『資本論』を読んだ人々

機感、眼前の政治・社会問題を素通りして、経済の基本的仕組みを理解しようとして『資本論』に向かったのである。逆にいえば彼らの『資本論』読書は、現実社会の認識への回路をもたない読みになっていたと考えられる。

また、一時的住民の社会的影響力はきわめて限られていた。国・県・町レベルの政治は蚕種製造業者を中心とする町の名望家によって運営されており、一時的住民の介入する余地はほとんどなかった。無論、蚕業技術に関する彼らの発言はそれなりに尊重されていたが、それ以外の問題では発言力はほとんどなかったのである。地付き住民である残りの半分の『資本論』読者とは、同じ本を読んでも交流はあまりなかったであろう。

一時居住者のまじめな『資本論』読書は、彼らの意識のなかでも、また梁川の社会のなかでも周囲との連環をもたない一種の「飛び地」の読書であった。

三

地付き住民の『資本論』読者は、8人である。ただそのうち眞生舎として記載されているが、これは柳沼惣太郎の経営する牛乳屋である。ただ、別途柳沼も記載されており、眞生舎の購読と柳沼個人の購読とがどのような関係にあったのかは分からない。また、柳沼惣太郎の履歴などは分からない。

残りの6人、中木直右衛門、加藤宗平、大友文樹、川上忠吉、信夫広三郎、石井孝平については、ある程度の経歴が分かるので、簡単に紹介する。まず、中木直右衛門。中木直右衛門家は梁川町きっての資産家で、代々直右衛門を襲名することになっている。先代は梁川製糸株式会社初代社長、県会議員、梁川郵便局長などをつとめた町の経済・政治の中心的担い手であった。同時に文化人としても知られ、早い時期から雑誌や書籍を購入し、『平民新聞』や『白樺』を購読するなど初期社会主義などに関心を寄せていたことは既に触れた。¹²⁾

この時期の中木直右衛門は第五代、襲名前の名は幹雄。代々蔵書家であったが、第五代直右衛門も「読書三昧、東西の名著を読破。しかも物知り顔を

せず、書庫にあって内面哲理を探るに汲々たり」と評された。¹³⁾

1928年の「新聞配達元帳」、「雑誌配達元帳」によれば、中木直右衛門は、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『福島民報』の三紙を定期購読し、『福島毎日新聞』を不定期にとっていた。通年で購読した雑誌はないが、『講談倶楽部』、『少年倶楽部』、『幼年倶楽部』、『少年世界』、『少女之友』、『改造』、『富士』、『アサヒグラフ』を随時購読していた。『少年倶楽部』、『幼年倶楽部』、『少年世界』、『少女之友』は主に家族のためであったろう。書籍は、『資本論』、『お鯉物語』、『菊池寛集』、『漫画大観』、『ムッソリーニ伝』、『壮快なるスキー術』、『三年の優等生』、『旅行案内』、『二科院展』、『帝展号』、『田園の英雄』、『名画展号』、教科書、当用日記など数多く購読している。円本では、『明治大正文学全集』を定期購読したほか、『日本児童文庫』、『現代大衆文学全集』、『現代日本文学全集』、『小学生全集』、『世界大衆文学全集』、『朝日常識講座』といった7種類の円本を数冊ずつ買っている。

中木直右衛門はもともと有数の読書家であり、経済的にも豊かであったから、これだけ多種多彩な購読を行えたことは間違いない。特に『改造』や『資本論』を読んでいることから、左翼思想に関心をもっていたことがうかがえる。実際、南会津郡伊南村の出身で1920年代半ば政治研究会福島支部の活動家であった渡部義通によれば、1925年秋、政治研究会が梁川で宣伝演説会を開いた後に、中木直右衛門から「立場上、あなたの運動に参加することはしないけれども、わたしにできるかたちで協力したい」と、財政援助の申し出があったという。1928年、いわゆる三・一五事件で渡部が検挙された際、中木直右衛門は渡部との密接な関係から検事局に召還されたが、その後も刑務所の渡部に公然と手紙を寄せ、ひんぱんに本の差入れなどをしたとされる。¹⁴⁾

梁川あるいは伊達郡有数の資産家でありながら、秘かに共産党に金品を援助していた中木直右衛門がどのような思想をもっていたのかを示す資料はない。しかし、一方で、中木は「思想的には日本主義、西郷隆盛を崇拜」していたとの評もある。¹⁵⁾ また『ムッソリーニ伝』を読んでいたことなどからすると、現在の社会・経済あるいは自分自身の矛盾を漠然と感じながら、その打

開策をどこに見いだすのか暗中模索していたのではなからうか。

しかし、中木直右衛門は、「立场上」運動に参加できないと自制していた。それは、中木家という代々続く家業（関東屋）への責任感、梁川という地域社会への責任感を強く意識していたからであろう。中木家は、明治期以来梁川町の基盤を整えるのに貢献してきたが、第五代直右衛門も私財を投じて中央幼稚園の建設を進めるなど町のために尽くしたという。¹⁶⁾

中木直右衛門は、自らの社会的あり方に疑問を持ち、自問していたのであろう。それが、『資本論』の読者となり、左翼運動への心情的共感となった。だが、他方で彼は、あくまで梁川の地域社会に生き、地域社会や自己の家業を守っていく責任も強く意識していた。彼の多彩な読書は、行動につながることはなかったのである。

加藤宗平は、明治期以来長い間町長であった田口留兵衛の養嗣子で、梁川の憲政会・民政党の有力者であった。1929年の県会議員選挙で県会議員に当選し、1934年からは町長を務めた梁川政界の有力者である。

彼は、『東京朝日新聞』を定期購読し、『東京日日新聞』も不定期に読んでいる。いずれも不定期だが、『文藝春秋』、『経済往来』、『インタナショナル』、『自由評論』といった雑誌を読み、『公民講座』、『禅の生活』、『エンサイクロペディア』という単行本、『小学生全集』という円本を購読している。『インタナショナル』というのが雑誌なのか書籍なのかも、その内容も分からないが、これ以外は社会運動への関心を伺わせるものは読んでいない。彼は町の指導者としての自覚から、当時の社会思潮の動向を知っておく必要を感じ、『資本論』を買ってみたのかもしれない。

大友文樹は、梁川町の出身のユニークな知識人・教師で今でも年配の町民から懐かしく思い出されている。大友は1899年生まれ、当時29歳。仙台商業学校で学び、在学中に作詩活動に入ったようだが、台湾銀行東京支店に就職。しかし、病気のため退職し、五十沢小学校代用教員を経て1923年から梁川小学校教員となった。教師としては近隣の小学校教師とともに「綴り方教育」に熱心に取り組み、昭和期になってからだが、文集「くわご」、「川岸」を発

行した。同時に自らも自由詩を志し、『波光る』、『北方詩人』などの詩雑誌に参加、東京の『日本詩人』、『詩神』にも投稿している。¹⁷⁾

戦争中、反戦思想をもっている嫌疑で警察の取り調べを受けたという話も伝えられている。戦後は、東邦銀行に勤務し、隣町の保原支店長などを務めた。¹⁸⁾

大友文樹は、新聞は『福島民報』を不定期にとっているだけだが、小学校に出勤すれば『東京日日新聞』、『国民新聞』、『福島民報』が毎日読めたはずだし、雑誌では『詩神』を定期購読し、『文藝春秋』、『改造』、『キング』、『経済往来』を時々買い、書籍では『低学年教育』、『教材王国』といった教育用書籍のほか、『資本論』、『大菩薩峠』、『葉山嘉樹集』などを買っていた。円本では『近代戯曲全集』を定期的に購読し、『明治大正文学全集』を数冊買っていた。年末には『当用日記』も買っていたから日記をつけていたのであろう。

彼は、強い文学志向をもっていたのだが、社会や思想の新しい動向にも敏感であった。その一環として『資本論』を読んだのであろう。梁川の若い世代の文化活動の中心で、梁川の文学や教育に新しい風を吹かせようともしていた。その点では、『資本論』やプロレタリア文学の読書は、間接的にせよ実践に発揮されていたのである。しかし、決して急進的なものではなく、「本業の教員、銀行員であることと地元であるがための様々な制約や、地方作家の悩みや焦燥のはざまでの文学活動であった」という『梁川町史』の評価はあたっていよう¹⁹⁾。

川上忠吉は、大正中期に武石長太郎、清水清助らと自由律俳句会「公孫樹会」を起こした人物である。さらに1928年に『伊達新報』を発刊し、三浦英太郎が1927年に創刊した『太陽新聞』にも寄稿するなど、この時期、若い世代の運動の中心人物の一人である。『伊達新報』第2号に伊達新報社として記載の電話番号は、昭和5年『福島県下特設電話番号簿』（仙台通信局発行）によれば「川上イネ 貸座敷業」と記載のある番号と同一であるので、川上家は貸座敷業を営んでいたことが分かる。イネは忠吉の母親であろうか。

川上忠吉は、『東京日日新聞』を不定期に読み、『キング』、『実業之世界』

『資本論』を読んだ人々

『婦人倶楽部』、『少年倶楽部』、『少女倶楽部』といった雑誌を取りかえながらとっている。さらに『資本論』、『大菩薩峠』、『日本随筆大成』、『一話一言』などの単行本を買い、『世界文学全集』、『現代大衆文学全集』、『世界大衆文学全集』、『講談全集』といった円本を何冊ずつか買っていた。彼の場合は、新聞、雑誌、円本などで定期的に購読していたものはないが、その関心は多方向に広がっている。

川上忠吉らは「公孫樹会」という同輩者サークルを作り、それまでの梁川の名望家秩序とは異なった運動を起こしていた。ただ、それは名望家秩序と対立的であったのではなく、選挙運動などでは名望家の実働部隊という性格をもちながら、同時にそれとは違う自己主張をもとうとしていたのである。若い世代の自己主張にとって中央の最新社会思潮について知識をもっていることは有効で、彼の読書はそのための仕込みという感をうける。

信夫広三郎は、1896年生まれで、1928年には32歳であったことになる。呉服太物商である信夫吉助の六男、梁川にあった私立学校伊達学館を卒業した後、同級生の加藤宗平らが上京進学したのに刺激され、上京を希望したが兄に反対され、無断で上京し加藤宗平の下宿に止宿した。日本大学夜学部に半年ほど通学したところで兄の訃報を受け梁川に戻り、信夫屋四代目を嗣いだという。²⁰⁾

恐らく信夫広三郎は、故郷に帰ってからも勉学の志望が強く、在京中に接したマルクス主義に関心を持ち続けていたのである。彼は、『資本論』だけでなく、『マルクス主義経済』、『マルクス主義講座』、『財界研究』を読み、雑誌『エコノミスト』も読んでいた。『資本論』を読むことは、不本意に諦めざるをえなかった学習を故郷で挽回しようとしたのであろう。

しかし、それらとは異質な雑誌『商店界』もとっていた。彼もやはり梁川の社会に生きているのであり、自分の家業を最新の知識で改善しようと『商店界』を読んだのであろう。信夫も左翼的な本を読んだが、そうした運動に関係したことはなく、その後は商工会の役員などを勤めた。

石井孝平は梁川の呉服商の家に1902年生まれた。当時26歳であったことに

なる。3歳のとき父を亡くし、小学校を出ると高等科に進学せず、直ちに地元の第百一銀行に給仕として入った。けなげな働きぶりが認められ、1920年に書記に昇格、以後1929年同行が破産休業するまで、勤勉実直な銀行員として勤務した。第百一銀行の経営危機は1928年には歴然としていたのだが、まさにその時期に彼は『資本論』を読みはじめたのである。小学校卒業して以来嘗々と務めてきた銀行の破綻という足下の地盤が崩れるような事態に深刻な社会矛盾を感じたのであろう。しかし、小学校だけの教育では『資本論』はかなり難解な書物であったと考えられる。

その後、不動産と株式売買の仕事に従事し、さらに梁川商業組合の書記長についた。戦後は、梁川町の収入役を長く務め、町民から信頼されたという。²¹⁾『キング』の実話記事にでも出てきそうな人生である。しかし、彼は『キング』は読まなかった。

石井は、新聞は『国民新聞』を時々読み、雑誌『幼年倶楽部』をとっていた。小さな子供がいたのであろうか。書籍では、『現代日本文学全集』、『朝日常識講座』という円本をバラで買い、単行本としては『資本論』、『我等の主張』、『無憂華』、『漢文叢書』、『選挙大観』、『商況記事見方』、『肉弾』、『哲学概論』、『將軍の木』、『啄木全集』、『うるさき人々』、『湖畔吟』、『朝日日記』、『国語』と実に様々な本を読んでいるのである。

彼は刻苦勉励型の人物で、独学によって様々な知識を身につけようとしているのである。この年にはとっていないが、1920年の「雑誌配達元帳」によれば雑誌『英語世界』、『中等英語』、『ABC』を購読している。ちょうど彼が銀行書記に昇格する時期であり、そのステップのために英語を学習しようとしていたのであろう。

『資本論』の読書も、こうした向学心の一環であることは明らかである。ただ貧乏と様々な煩悶をうたった石川啄木の全集を読んでいることからすると、勉学と出世を無邪気に信じていたのではなく、心中には葛藤を抱えて生きていたと推察できる。

このような地付き住民の『資本論』読者は、それぞれ個性的であるが、い

『資本論』を読んだ人々

ずれも梁川の社会の逸脱者・周縁者ではない。むしろ、町の中心である。

あえていえば、信夫や石井のように途中で終わった学習を挽回しようとする向学心に発しているタイプ、大友、川上あるいは中木のように町から育った知識人として中央の社会動向・文化動向に強い関心を持ち、それをなんらかのかたちで梁川の町にいかしていこうとするタイプとがあった。経済的に比較的恵まれていたせいか、体系的とまではいえないが、『改造』、プロレタリア文学や『大菩薩峠』といった社会問題と隣接分野の雑誌・書籍も読んでおり、農業技師たちより連環性をもった読書である。

いずれにせよ、町の中心に位置する住民たちが、難解な『資本論』を読もうとした背後には、蚕業の不振が次第に深刻化していく不安感・危機感が存在していたことは間違いない。これまで梁川の町は、霜害や水害など何度も大きな危機を体験してきたが、そのたびに町民の地道な努力によって克服され、梁川社会・経済は維持されてきたのである。ところが、1920年代の危機は、日本の蚕業・生糸産業全体が陥った危機であり、それに連動して金融恐慌が襲ってきた。

梁川の人々が長年培ってきた社会の基盤は大きく揺らいでいたのである。それは、日本経済全体さらには世界経済の構造から起きている大震動であり、もはや住民の努力によっては如何ともしがたい問題であることはうすうす感じられていた。多くの住民には、なぜこんなことになってきているのかという大きな疑問が大きくのしかかっていたのである。その答えを探そうとする手探りが、『資本論』などの読書をうながすことになった。

四

以上、1928年の東北の小さな町での『資本論』読者について述べてきた。だが、格別結論らしい結論があるわけではない。しかし、これまでの1920年代30年代社会についての通説的イメージを考え直す材料が伏在しているはずである。

最後に蛇足を書けば、ここに取りあげたのは、小さな町の名もない住民た

ちである。大きな歴史に登場することは決してない人々である。しかし、それでも彼らは名前をもっている。そこでさらに考えなければならないのは、最初にも述べたように梁川での新聞購読率が50%強程度であったことである。残りの50%に人たちは、「新聞配達元帳」、「雑誌配達元帳」には登場せず、名前すら知ることができない。彼らは、『資本論』どころか新聞や本とはほとんど縁のないところで生活していたのである。だが、彼らが梁川の社会の重要な構成員であったことは間違いない。梁川の社会のメディアやコミュニケーションは、この無名の人々ぬきに考えることはできないのである。しかし、ここまで言うのは簡単なのだが、無名の人々の生活について知る方途は今のところ見いだすことはできない。

註

- 1) E. P. Thompson, "History from Below," in E. P. Thompson, *The Essential E. P. Thompson* (2001 New York)
- 2) 「下からのメディア史」というのは、魅力的な言葉なので取りあえずそうしておく。しかし、コミュニケーションは、上下関係ではなく、水平的関係と見るべきだとすると、「下から」という言い方は不適切だろう。
- 3) これまで発表した論文は、「ある地域社会における新聞雑誌購読」『メディア史研究』第15号(2003年11月)「電話導入初期と地域社会/明治末期から大正初期梁川町における」『メディア史研究』第17号(2004年11月)「日露戦争とメディア 地域社会の視点から」東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』(2008年 ゆまに書房)「大正前半期梁川町のメディア・コミュニケーション」『メディア史研究』第22号(2007年6月)「一九二〇年代の梁川社会とメディア 大衆化・平準化・個人化と地域社会」『メディア史研究』第24号近刊。
また、メディア史における読者研究の方法論については、「メディア史研究における読者研究」『マス・コミュニケーション研究』第37号(2005年6月)で述べた。
本稿は、これら拙稿と一部重なるところがあるが、ご了承いただきたい。
- 4) 画家としても知られる蠣崎波響の描いた当時の梁川城下の図は彼の代表作の一つである。蠣崎波響については、中村真一郎『蠣崎波響の生涯』(1989年 新潮社)。
- 5) 梁川町史編纂委員会編『梁川町史』(1987年 梁川町)第8巻180ページ。
- 6) 「新聞配達元帳」に記載されているのは個人名だが、多くは世帯主と推定でき、記

『資本論』を読んだ人々

載個人名を仮に世帯主または戸主とみなして世帯普及率を算出した。世帯数は1930年国勢調査によった。『梁川町史』記載の戸数をもとに戸別新聞普及率を算出すると、約60%である。

- 7) 高畠素之訳のカール・カウツキー『資本論解説』(改造社)であろう。
- 8) 『梁川町史』第8巻613ページ。
- 9) 「梁川町郷土史」『梁川町史資料集第29集』(1990年 梁川町史編纂委員会)191ページ。
- 10) 掛川トミ子「野間清治と講談社文化」『思想の科学』1959年10月号。
『キング』の読者についての優れた研究は、永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(1997年 日本エディタースクール出版部)である。また、筒井清忠『日本型「教養」の運命』(1995年 岩波書店)も参照。
『キング』についての最近の研究は佐藤卓己『キングの時代』(2002年 岩波書店)。
- 11) R・シャルチエ(福井憲彦訳)『読書の文化史 テキスト・書物・読解』(1992年新曜社)3ページ。
- 12) 前掲拙稿「ある地域社会における新聞雑誌購読」。
- 13) 伊達郡人像刊行会編『現代に生きる伊達郡人像 第一集梁川編』(1970年 伊達文化通信社)148ページ。
- 14) 渡部義通述ノヒアリング・グループ編『思想と学問の自伝』(1974年 平凡社)。
- 15) 前掲『現代に生きる 伊達郡人像』148ページ。
- 16) 前掲『現代に生きる 伊達郡人像』148ページ。
- 17) 大友文樹については、『梁川町史』第3巻376ページ、470ページ。
- 18) 『梁川町史』第10巻520ページ。
- 19) 『梁川町史』第10巻518ページ。
- 20) 前掲『現代に生きる 伊達郡人像』68ページ。
- 21) 前掲『現代に生きる 伊達郡人像』14ページ。

本稿を書くにあたっては、阿部回春堂の阿部長兵衛氏をはじめ、旧梁川町史編纂室の八巻善兵衛氏、旧梁川町役場生涯学習課など多くの梁川町の方々のお世話になった。心から感謝したい。

<追記>

生瀬克己氏と初めて知り合ったのは、私が桃山学院大学に職を得た1976年のことである。以来、生瀬氏の独特の発想、ものの見方に多くのことを学ばせていただいた。狭山のお宅には、滝澤武人氏と週一回ほどのペースで勉強と称してお伺いし、放談笑談を楽しませていただいた。無理やり温泉旅館に引きずり出して大酒を飲ん

だことも数回あった。

最近は、お宅にお邪魔する回数も減り、時々電話で長話するぐらいになってしまったが、それでも節目節目に生瀬氏の刺激的な話を聞き、私の愚痴を聞いてもらうのは私にとって大きな楽しみであった。今回も生瀬氏が元気なら、少しは面白がって辛辣な批評を浴びせるような文章を書きたかったが、中途半端であったようだ。

これから降り坂を一緒にゆっくり下りていく友人を突然失って悲しい。